再生する樹木の説話

高戸　聰

はじめに

南方熊楠氏に「巨樹の翁の話」[1]と題する一篇がある。氏は、傷口が癒合する樹木を語る、日本の昔話から説き起こし、再生する樹木や大樹の話を、中国はもとより広く古今東西の書籍から挙げている。ただ氏は、大樹の話に焦点を移しており、再生する樹木の説話については詳述していない。そこで小論では、屋下に屋を架するを顧みず、再生する樹木の説話に焦点を絞って、古代中国の説話からどのような変遷を経て、日本の昔話に引き継がれていったのかを跡づけてみたいと思う。

まず、再生する樹木の昔話を確認しておきたい。南方熊楠氏が「巨樹の翁の話」で取り挙げている話とほぼ同様の筋立てで、現在も十津川村に伝わっている「七本ヒノキ」という昔話の梗概を述べる。

昔、迫西川（せいにしかわ）に七本桧という、根元が一本で途中から七本に分かれ、その一本一本が二抱えも三抱えもある大変大きな木があった。ある時、杣師七人で、七本桧を切り倒すことになり、懸命に斧を振るったが一日では切り倒すことができなかった。あくる朝、杣師たちが七本桧に行ってみると、切ったはずの木っ端は一枚も

なくなり、七本桧はすっかり元通りになっていた。こんなことが六日も続いた。そこで杣師たちが夜に出かけていくと、七人の坊さんが木っ端を桧の切り口にくっつけていた。そのうちの一人が「この木っ端をもし焼かれたら困ることになるのだが」と言った。次の朝、杣師たちはできる木っ端をどんどん焼いていき、夕方にはとうとう切り倒すことができた。その夜、杣師たちはぐっすりと眠りについた。明け方、戸を叩く音でかしきが目を覚まし戸を開けると、七人の坊さんが入ってきて、眠っている杣師たちの頭を次々になでていった。かしきが坊さんたちを見送ると、坊さんたちはさいこの滝で金の鶏に姿を変え大空高く舞い上がった。かしきが小屋に帰ってみると、杣師たちはみな息が絶えていた。[2]

この「七本ヒノキ」は、切ったはずの木が再生すること、切り倒す方法を盗み聞くこと、の二つの要素から構成されている。小論では、これら二つの要素を中心に、中国古典からの変遷を見ていくこととしたい。

一　樹木が再生する現象と災異思想

まず、古代中国では樹木が再生する現象について、どのように理解されていたのだろうか。前漢の東方朔の作とされる、『神異経』に次のような説話がある。

東方荒外、有豫樟焉。樟樹主一州。其高千丈、圍百丈、本上三百丈、始有枝條、敷張如帳。上有玄狐黒猿。樹主一州、南北並列、面向西南。有九力士操斧伐之、以占九州吉凶。斫復、其州有福。創者州伯有病。積歳不復者、其州滅亡。「復」者木創復也。出『神異經』。（東方の荒外に、予樟有り。樟樹は一州を主る。其の高さ千丈、囲は百丈、本の上三百丈にして、始めて枝條有り、敷張すること帳の如し。上に玄狐・黒猿有り。樹は一州を主り、南北に並列し、西南に面向す。九力士有りて斧を操り之を伐り、以て九州の吉凶を占ふ。

斫りて復せば、其の州に福有り。創つかば州伯に病有り。積歳して復さざれば、其の州は滅亡す。「復」とは木の創復するなり。『神異経』に出づ。[3])

東の果てにある巨大な樟樹は、「九力士」が斧で切っても傷口が塞がるという。ただ「積歳して復せざれば」とあり一晩で塞がるとされていないが、古代中国において切り口が復する神秘的な樹木が想定されていたことは窺い知ることができる。また「九力士」が樟樹を切ることは、「九州の吉凶を占ふ」ためとされている点も注意しておきたい。

ところで、『神異経』の成立年代は確定できず、右記が再生する樹木の説話の初出であるかは確言できない。しかし、史書に目を転ずれば早くも『漢書』から、再生する樹木の現象を確認できる。

前漢・昭帝の時、一度切り倒された樹木が再び立つという現象が発生した。

昭帝時、上林苑中、大柳樹斷仆地、一朝起立、生枝葉。有蟲食其葉、成文字曰、「公孫病已立」。昌邑王國社有枯樹復生枝葉。眭孟以爲、「木陰類、下民象、當有故廢之家公孫氏從民間受命爲天子者」。昭帝富於春秋、霍光秉政、以孟妖言、誅之。後昭帝崩、無子、徵昌邑王賀嗣位、狂亂失道、光廢之。更立衛大子之孫。是爲宣帝。宣帝本名病已。京房『易傳』曰、「枯楊生稊、枯木復生、人君亡子」。（昭帝の時、上林苑の中に、大柳樹断たれて地に仆れ、一朝にして起立し、枝葉を生ず。虫有りて其の葉を食らひ、文字を成して曰はく、「公孫病已立つ」と。昌邑王の国社に枯樹の復たび枝葉を生ずること有り。眭孟以為へらく、「木は陰の類にして、下民の象なり、当に故廃の家の公孫氏 民間従り命を受けて天子と為る者有るべし」と。昭帝は春秋に富み、霍光は政を秉れば、孟を以て妖言として、之を誅す。後に昭帝崩じ、子無ければ、昌邑王賀を徵して位を嗣がしむも、狂乱にして道を失へば、光之を廃す。更に衛大子の孫を立つ。是れ宣帝為り。宣帝の本の名は病已なり。京房『易伝』に曰はく、「枯楊稊を生じ、枯木復たび生ぜば、人君に子亡し」と。[4])

切り倒された「大柳樹」が再び立って枝葉を生じた。その葉には虫食いの跡があり「公孫病已立つ」と読めた。後に果たして、昌邑王・劉賀が廃され、代わって宣帝すなわち劉病已が即位した、という記事である。

『漢書』五行志では、眭孟の言葉を引用して、切り倒された樹木が再び立つ現象を、「民間」から天命を受けて「天子と為る者」が現れる兆しと見なしている。併せて京房の『易伝』を引き、「国社に枯樹の復たび枝葉を生」じたことも含めて、宣帝が即位することの祥瑞と判断しているのである。

続けて同じく『漢書』五行志から、やはり切り倒された樹木が再び立った例を挙げよう。

建昭五年、兗州刺史浩賞禁民私所自立社。山陽橐茅郷社有大槐樹。吏伐斷之。其夜樹復立其故處。成帝永始元年二月、河南街郵樗樹生支如人頭。眉目須皆具、亡髪耳。哀帝建平三年十月、汝南西平遂陽郷柱仆地、生支如人形。身青黄色、面白、頭有顓髪、稍長大、凡長六寸一分。京房『易傳』曰、「王徳衰、下人將起、則有木生爲人狀」。（建昭五年、兗州刺史の浩賞（こうしょう）民に私に自ら立つる所の社を禁ず。山陽の橐茅（たくぼう）郷の社に大槐樹有り。吏之を伐断す。其の夜樹復たび其の故の処に立つ。成帝の永始元年二月、河南の街郵の樗樹 支（えだ）に人の頭の如きを生ず。眉目須皆具はり、髪亡きのみ。哀帝の建平三年十月、汝南の西平遂陽郷の柱 地に仆れ、支に人の形の如きを生ず。身は青黄色にして、面白く、頭に顓髪（ひげ）有りて、稍く長大して、凡そ長六寸一分なり。京房『易伝』に曰はく、「王の徳衰へ、下人将に起らんとせば、則ち木生ずるに人の状を為すこと有り」と。[5]）

『漢書』五行志は、建昭五年官吏によって切られた大槐樹が夜のうちに元の場所に立った記事、及び永始元年河南・建平三年汝南でそれぞれ樹木に人の姿のようなものが生えた記事を併記し、京房『易伝』を引用して「王の徳衰へ、下人将に起らんとせば、則ち木生ずるに人の状を為すこと有り」と結ぶ。

ここで「下人将に起らんと」する兆しとされるのは、樹木に人の姿のようなものが生じることであり、切り倒された樹木が再び立ったことは含まれていないように読める。しかし、二つの現象が併記されていること、さら

に先に引用した眭孟の言葉を考え合わせると、「下人将に起らんと」する兆しには切り倒された樹木が再び立つ現象も含まれていると思われる。

いずれにせよ、『漢書』五行志では、切り倒された樹木が再び立つ現象も含む、樹木の怪異を災異思想の文脈で理解しているのである。[6]

樹木の怪異を災異思想によって理解しようとする発想は、時代が下って『南史』にも見ることができる。六朝梁の時代、侯景が建康を陥落させ帝位を簒奪した時、樹木が再生する怪異が発生した。

時都下王侯庶姓五等廟樹、咸見殘毀。唯文宣太后廟四周栢樹獨鬱茂。及景簒、脩南郊路。偽都官尚書呂季略、説景令伐此樹以立三橋。始斫南面十餘株、再宿悉枿生、便長數尺。時既冬月、翠茂若春。賊乃大驚惡之、使悉斫殺。識者以爲、「昔僵柳起於上林、乃表漢宣之興、今廟樹重青、必彰陝西之瑞」。（時に都下の王侯庶姓五等の廟樹、咸な残毀せらる。唯だ文宣太后廟の四周の栢樹のみ独り鬱茂す。景の簒ふに及び、南郊の路を修む。偽都官尚書の呂季略、景に説きて此の樹を伐り以て三橋を立てしむ。始め南面の十余株を斫るに、再宿して悉く枿（きりかぶ）の生ずること、便ち長さ数尺なり。時既に冬月、翠茂すること春の若し。賊乃ち大いに驚き之を悪み、悉く斫殺（しゃく）せしむ。識者以為へらく、「昔僵れし柳の上林に起つは、乃ち漢宣の興るを表す、今廟樹の重ねて青むは、必ず陝西の瑞を彰す」と。）[7]

偽都官尚書の呂季略が文宣太后廟の柏樹を切らせたところ、二晩で切り倒された樹木が再生し葉まで繁茂した。この現象を、『南史』では「識者」の見解を引用する形で、「昔僵れし柳の上林に起つは、乃ち漢宣の興るを表す、今廟樹の重ねて青むは、必ず陝西の瑞を彰す」と理解している。まず「昔僵れし柳の上林に起つは、乃ち漢宣の興るを表す」は、先に引用した『漢書』五行志の「昭帝の時、上林苑の中に、大柳樹断たれて地に仆れ、一朝にして起立し、枝葉を生」じたことが、宣帝即位の瑞兆とされた条を指している。「識者」は、この条を踏まえ、文

宣太后廟の柏樹が再生したことを、「陝西の瑞」すなわち楊堅の出現と重ね合わせて判断しているのである。

ここまで、切られた樹木が再生する説話や記事を見てきた。『神異経』では、樟樹に切りつけ「復」するか否かで「九州の吉凶」が占われていた。また『漢書』五行志および『南史』では、樹木の再生が後に皇帝となる者の出現する予兆とされていた。このように、切られた樹木が再生する現象は、国家の興亡に関わる災異思想の文脈で、まずは理解されていたのである。

それでは、樹木が再生する現象は、常に災異思想の文脈で理解されるべきものだったのだろうか。次章では、個人の事跡や体験に関わるものを見ていく。

二　災異思想から個人的な体験へ

前章では、国家の興亡に関わる予兆としての樹木の再生を確認してきた。本章では個人の次元で解釈される、再生する樹木の説話を見ていくことにしよう。

まず、後漢から三国時代を生きた賈逵（かき）について、彼が亡くなった後のこととして、次のような話が伝えられている。

賈逵在豫郡亡、家迎喪去。去後、恆見形於項城。吏民以其戀慕彼境、因以立廟。廟前有栢樹。有人竊來斫伐。始投斧刃、仍著於樹中。所著處尋而更生。項城左右人莫不振怖。出「賈逵碑」。（賈逵は豫郡に在りて亡（し）し、家喪を迎へて去る。去る後、恒に形を項城に見（あら）はす。吏民其の彼の境を恋慕するを以て、因りて以て廟を立つ。廟の前に栢樹有り。人の窃かに来たりて斫伐すること有り。始め斧刃を投じ、仍りて樹の中に著く。著く所の処尋（つ）いで更生す。項城左右の人振怖せざる莫し。「賈逵碑」に出づ。[8]）

吏民が賈逵のために建てた廟の前に、柏樹が生えていた。この柏樹を盗賊が切り倒そうとしたところ、斧による傷口が立ちどころに塞がったという。賈逵は死後も「形を項城に見は」しており、柏樹の再生も彼の霊威によるものと認識されたのだろう。そのため、「柏樹」の「更生」したことが「賈逵碑」に刻まれたと推測できる。

「賈逵碑」の例は、あくまでも賈逵個人の次元で理解されており、前章で確認したような国家の興亡に関わる災異思想の文脈では理解されていない。

次に、『異苑』に記される樹木の怪異を挙げよう。句章の呉平州という者の家の前に青桐の樹が生えていた。

句章呉平州門前、忽生一株青桐樹。上有謠歌之聲。平悪而斫殺。平隨軍北虜、首尾三載。死桐欻自還、立於故根上。聞聲樹巔空中歌曰、「死樹今更青、呉平尋當歸」。適聞殺此樹、已復有光輝。平尋歸、如鬼謠。（句章の呉平州の門前に、忽ち一株の青桐樹を生ず。上に謠歌の声有り。平悪みて斫殺す。平軍に随ひ北のかた虜となり、首尾三載す。死桐欻（たちま）ち自ら還り、故の根の上に立つ。声の樹の巔（いただき）の空中に歌ふを聞くに曰はく、「死樹今更に青めば、呉平尋いで当に帰るべし」と。適たま聞きて此の樹を殺すも、已に復たび光輝有り。平尋いで帰ること、鬼謠の如し。[9]）

「青桐樹」は、呉平州によって切り倒された後、元の切り株に戻り再生したが、再び人によって切られてしまう。それでもこの「青桐樹」は、またも再生したのである。この「呉平州」では、「上に謠歌の声有り」や「声の樹の巔の空中に歌ふ」とあり、その歌は「鬼謠」と表現されている。このことから、鬼が樹木に取り憑いて声を発したり、樹木を再生させたりしていた、と認識されていたと思われる。

このように、樹木そのものが怪異を起こすのではなく、樹木に取り憑いた何者かが怪異を起こしていると思われる説話は、次に挙げる『風俗通義』[10]にも見ることができる。

後漢の張遼（ちようりよう）、字は叔高は、土地建物を購入した。しかし、その敷地内には大樹が生えていた。

謹按、桂陽太守江夏張遼叔高、去鄢令、家居買田。田中有大樹十餘圍、扶疏蓋數畝地、播不生穀。遣客伐之、六七血出。客驚怖、歸具事白叔高。叔高大怒曰、「老樹汁出、此何等血」。因自嚴行、復斫之、血大流灑。叔高使先斫其枝。上有一空處。白頭公可長四五尺、忽出往赴叔高。叔高乃逆格之、凡殺四頭。左右皆怖伏地。而叔高恬如也。徐熟視、非人非獸也。遂伐其樹。其年司空辟侍御史兗州刺史。以二千石之尊、過鄉里、薦祝祖考、白日繡衣、榮羨如此。其禍安居。『春秋國語』曰、「木石之怪夔魍魎」。物悪能害人乎。（謹しみて按ずるに、桂陽太守江夏の張遼叔高、鄢（えん）令に去き、家居して田を買ふ。田中に大樹十余囲有りて、扶疏たりて数畝の地を蓋ひ、播くも穀を生ぜず。客を遣はし之を伐らしむに、六七血出づ。客驚き怖れ、帰りて具に事を叔高に白す。叔高大いに怒りて曰はく、「老樹汁の出づるは、此れ何等血ならんや」と。因りて自ら厳行し、復た之を斫るに、血大いに流れ灑ぐ。叔高先に其の枝を斫らしむ。上に一空処有り。白頭公の長四五尺可り、忽ち出でて叔高に往き赴く。叔高乃ち之を逆（むか）へ格（う）ち、凡そ四頭を殺す。左右皆怖れて地に伏す。而るに叔高は恬如たるなり。徐ろに熟視するに、人に非ず獸に非ざるなり。遂に其の樹を伐る。其の年司空 侍御史兗州刺史に辟す。二千石の尊を以て、鄉里を過り、祖考を薦祝し、白日に繡衣し、栄羨たること此の如し。其の禍は安くにか居らんや。『春秋国語』に曰はく、「木石の怪は夔魍魎なり」と。物悪くんぞ能く人を害せんや。）

叔高の買った土地に十余囲もの大樹があり、使用人に切らせようとしたところ木から血が流れ出す。叔高が先に枝を払わせると、「白頭公」という人とも獸ともつかない者たちが向かってきたので、全て斬り殺したという。

この「白頭公」の説話では、大樹に宿っていた「白頭公」が、宿主の大樹を切り倒させないようにするため、大樹に血を流させていたと思われる。また樹木が血を流すという怪異は、叔高の個人的な経験として語られており、「賈逵碑」および「呉平州」の例と同様に、国家の興亡に関わる災異思想の文脈では理解されていない。

もともと樹木が再生する現象は、災異思想の文脈で理解されていた。しかし、後漢以降、個人の次元で理解さ

れたり、個人的な経験として記録されるようになっていった。さらに、説話化していき六朝志怪に取り入れられていった、と考えられる。[11]

ついで次章では、再生する樹木の説話に付け加えられた、新たな要素を検討していこう。

三　盗み聞き要素の出現

六朝志怪の『搜神記』には、新しい要素が付加された、再生する樹木の説話が採録されている。秦の文公が、怒特祠に生えている梓樹を切らせようとしたところ、傷口がすぐに癒合して再生してしまう。

武都故道有怒特祠。土生梓樹焉。秦文公二十七年、使人伐之。樹創隨合、經日不斷。文公乃益發卒、持斧者四十人、猶不斷。士疲還息。其一人傷足、不能去、臥樹下。聞鬼相與言勞乎攻戰。其一人曰、「何足爲勞」。又曰、「秦公必將不休如之何」。答曰、「秦公其如予何」。又曰、「赭衣灰坌子如之何」。默然無言。臥者以告。於是令工皆衣赭、隨斫創坌以灰。樹斷化爲牛。使騎擊之不勝。或墮於地、髻解被發。牛畏之、乃入水不敢出。故秦自是置旄頭騎。（武都の故道に怒特祠有り。土に梓樹生ず。秦の文公二十七年、人をして之を伐らしむ。樹の創隨ひて合し、日を経るも断たず。文公乃ち益ます卒を発して、斧を持する者四十人なるも、猶ほ断たず。士疲れて還り息ふ。其の一人 足を傷つけて、去る能はざれば、樹の下に臥す。鬼の相ひ与に攻戦に労ふを言ふを聞く。其の一人曰はく、「何ぞ労と為すに足らんや」と。又た曰はく、「秦公必ず将に休まざらんとすれば之を如何せん」と。答へて曰はく、「秦公其れ予を如何せん」と。又た曰はく、「赭衣灰坌せば子 之を如何せん」と。黙然として言ふこと無し。臥す者以て告ぐ。是に於いて工をして皆赭を衣、斫るに随ひて創に坌くるに灰を以てせしむ。樹断ち化して牛と為る。騎をして之を撃たしむるも勝たず。或ひと地に堕ち、髻解

けて被発す。牛 之を畏れ、乃ち水に入りて敢へて出でず。故に秦は是自り旄頭騎を置く。[12])

梓樹は切りつけられても、その傷口がすぐに塞がってしまう。そのため、文公は人足を増したが、それでも梓樹を切り倒すことができなかった。しかし、一人の人足が足を負傷したので樹下で一晩明かしていると、「鬼の相与に攻戦に労ふを言ふを聞く」と、鬼たちの会話を盗み聞いた。鬼の会話から切り倒す方法を知った人足が、秦公に告げ、その通りにして梓樹を切り倒すことができた。

樹木が再生する点はこれまで確認してきた例と同様だが、この「怒特祠」では、鬼たちの会話から樹木を切り倒す方法を盗み聞くという要素が新たに付加されている。人ならざる者たちの会話を盗み聞くことで物語が展開していく要素は、「怒特祠」と同じく『搜神記』に採録されていたとされる、「陳仲挙」の説話にも見ることができる。[13]

人ならざる者たちの会話を盗み聞く要素は、古くは『春秋左氏伝』に見ることができる。魯の成公十年、晋侯は大厲(たいれい)が襲いかかってくる夢を見た。

晉侯夢大厲被髪及地、搏膺而踊曰、「殺余孫不義。余得請於帝矣」。壞大門及寢門而入。公懼入于室。又壞戸。公覺召桑田巫。巫言如夢。公曰、「何如」。曰、「不食新矣」。公疾病、求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。未至、公夢疾爲二豎子曰、「彼良醫也。懼傷我。焉逃之」。其一曰、「居肓之上、膏之下、若我何」。醫至曰、「疾不可爲也。在肓之上、膏之下、攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可爲也」。公曰、「良醫也」。厚爲之禮而歸之。六月丙午、晉侯欲麥、使甸人獻麥。饋人爲之。召桑田巫、示而殺之。將食張如廁、陷而卒。小臣有晨夢負公以登天。及日中、負晉侯出諸廁。遂以爲殉。(晉侯夢みるに大厲の被髪 地に及び、膺(むね)を搏ち踊りて曰はく、「余が孫を殺すは不義なり。余 帝に請ふを得」と。大門及び寢門を壞して入る。公懼れて室に入る。又た戸を壞す。公覚めて桑田の巫を召す。巫の言ふこと夢の如し。公曰はく、「何如」と。曰はく、「新を食らはず」と。公 疾(やまい)み病

なりて、医を秦に求む。秦伯 医緩をして之を為めしむ。未だ至らずして、公夢みるに疾 二豎子と為りて曰はく、「彼は良医なり。懼らくは我を傷らん。焉にか之を逃れん」と。其の一曰はく、「肓の上、膏の下に居らば、我を若何せん」と。医至りて曰はく、「疾は為むべからざるなり。肓の上、膏の下に在りて、之を攻むるも可ならず、之を達するも及ばず、薬も至らず、為むべからざるなり」と。公曰はく、「良医なり」と。厚く之が礼を為して之を帰す。六月丙午、晋侯 麦を欲し、甸人をして麦を献ぜしむ。饋人 之を為す。桑田の巫を召し、示して之を殺す。将に食らはんとし張り廁に如き、陥ちて卒す。小臣 晨に公を負ひ以て天に登るを夢みること有り。日中に及び、晋侯を負ひ諸を廁より出だす。遂に以て殉と為す。[14])

晋侯が「大厲」の夢を占わせたところ、巫は「新穀を食べることはできないでしょう」と告げる。続いて病に罹った晋侯は、秦から医者を呼び寄せる。すると今度は、病が二人の童子となって会話する夢を見た。この会話の中で病が膏肓に入ったので、もう治らないことが示唆される。果たして、秦からやって来た「良医」はもう治す術がないことを告げたのだった。

この「病膏肓に入る」説話では、二人の童子の会話を聞いただけで、その内容によって事態が打開される等の展開にはなっていない。ただ、人ならざる者たちの会話を盗み聞く要素を認めることはできるだろう。

ここまで確認してきた、中国古典に見られる再生する樹木の説話の変遷をまとめると次のようになる。もともと再生する樹木の怪異は国家の興亡に関わる災異思想の文脈で理解されていたが、後漢以降には個人的な体験を語る形で採録されるようになった。さらに、先秦時代から伝わっていた、人ならざる者たちの会話を盗み聞く要素が付加された。そして、会話を盗み聞くことで状況が打開され、切れなかった樹木を切り倒す説話として成立していった。

それでは、本章まで確認してきた中国古典の説話は、日本に伝わることでどのように変化していったのだろうか。

次章では日本に伝わった説話を見ていくこととしよう。

四　日本における再生する樹木の説話

まず日本では、切れない樹木を切り倒す説話が、『今昔物語集』に「推古天皇、造元元興寺語 第二十二」[15]と題して記録されている。なお、以下の引用文では、カタカナの部分をひらがなに改め、部分的に書き下し文に改めている。

今昔、推古天皇と申す女帝の御代に、此の朝に仏法盛に発て、堂塔を造る人世に多かり。天皇も、銅を以て丈六の釈迦の像を、百済国より来れる□と云ふ人を以て鋳しめ給て、飛鳥の郷に堂を起て、此の釈迦仏を安置せしめ給はむとして、先づ堂を造らるる間、堂を起つべき所に、当に生けむ世も知らず古き大なる槻有り。「疾く切り去けて堂の壇を築べし」と宣旨有て、行事官立て是を行ふ間、行事と木□曳出よ」など喧て、皆人逃て去ぬ。

其後、程を□伐るべきなり、と定められて、亦、他の人を以て伐らしむるに、始も斧・鐇を二三度許打立る程に死しかば、亦、此の度も惶ぢ寄て伐らしむる程に、亦、前の如く俄に死ぬ。具の者共、皆是を見て斧・鐇を投げ棄て、身の成らむ様も知らず、逃て去ぬ。其後は、「何なる勘当有と云とも、今は更に木の辺に寄るべきに非ず。命の有らばこそ公にも仕らめ」と云て、惶ぢ迷ふ事限無し。

其時に、或る僧の思はく、「何なれば、此の木を伐には人は死る」と、「構て此事知らばや」と思て、雨の隙無く降る夜、僧自ら蓑笠を着て、道行く人の木蔭に雨隠したる様に、木の本に窃に抜足に寄て、木の空の傍に窃に居ぬ。夜半に成る程に、木の空の上の方に多の人の音聞ゆ。聞けば、云なる様、「かくて度ぢ伐りに寄来る者を伐らしめずして、皆蹴殺しつ。さりとて、遂にきらぬやう有らじ」と云へば、亦、異音して、「さ

りとも、毎度にこそ蹴殺さめ。世に命惜しまぬ者無ければ、寄来て伐らむ者有らじ」と云ふ。異音して、「若麻苧の注連を引廻らして、中臣祭を読て、杣立の人を以て縄墨を懸て伐らむ時ぞ、我等術尽くべき」と云ふ。亦、異音共して、「現に然る事なり」と云ふ。亦、異音共、歎たる言共にて云合る程に、鳥なきぬれば音もせず。僧、「賢き事を聞ぞ」と思て、抜足に出ぬ。

其後、此由を奏すれば、公感じ喜給て、其僧の申す如くに、麻苧の注連を木の本に引廻て、木の本に米散し幣奉て、中臣祓を読ましめて、杣立の者共を召て、縄墨を懸て伐らしむるに、一人も死ぬる者無し。木漸く傾く程に、山鳥の大さの程なる鳥、五六計、木末より飛立て去ぬ。其後に木倒れぬ。皆伐り揮て、御堂の壇を築く。其鳥共は南なる山辺に居ぬ。天皇此由を聞給て、鳥を哀て、忽に社を造、其鳥に給ふ。今に神の社にて有り。龍海寺の南なる所なり。……後略……

推古天皇の時、飛鳥に釈迦像を安置するための堂を建ることになり、造成予定地に生えていた大きな槻木を切り倒そうとした。しかし、切り倒そうとした杣人たちが次々と死んでしまったのだった。そこで、ある僧が訳を知ろうと蓑笠を着て木陰に隠れていたところ、夜半に人ならざる者たちの会話を盗み聞く。その後、盗み聞いた通りにして、無事に樹木を切り倒すことができた。

前章に挙げた「怒特祠」では、切り口が再生するので樹木を切り倒すことができなかった。しかし、右記の「造元元興寺語」では、「山鳥の大さの程なる鳥」が杣人たちを「蹴殺し」て、誰も近づけさせなかったため、樹木を切り倒せなかったとされている。この点から見れば、「造元元興寺語」は、再生する樹木の説話ではないと言えるかも知れない。ただ、「造元元興寺語」は人ならざる者たちの会話を盗み聞くことで状況が打開されており、「怒特祠」を元に創作されたと考えられる。そのため「造元元興寺語」は、再生する樹木の説話とは言い難いが、これまで小論で検討してきた説話の系譜を引いていると言うことはできるだろう。

さて、『今昔物語集』に取り入れられてより、再生する樹木の説話は日本各地に伝播して昔話として定着していく。そこで次に、『日本昔話大成』[16]「本格昔話話型四〇　大木の秘密」（奈良県・天理市）を引用しよう。

伊賀から来た男が、京都の楠の一枚天井を見て同じような堂を建てようと思う。堂ヶ谷で大きな楠を見つけて切ると血が出る。切り倒したところ枝が目に当たって失明する。切ったはずの木が元通りになる。木の葉の落ちたのを敷いて寝ると、夜、天狗と楠が、海藻のあらめの汁をかけられたらだめだが、人間は知らないと話している。聞いたとおりにすると血も出ずに切り倒せる。千年経っても腐らない楠の根の石になる。

この「大樹の秘密」からは、切り倒された樹木が元に戻ること、人ならざる者たちの会話を盗み聞くこと、の二つの要素を確認できる。切り倒された樹木が再び立つという要素は、第一章で確認したように『漢書』五行志より引き継がれてきたものである。また、人ならざる者たちの会話を盗み聞く要素は、前章で確認した『春秋左氏伝』に始まり、「怒特祠」に取り入れられ、『今昔物語集』に引き継がれてきた要素である。

ところで、「大木の秘密」には、樹木が血を流す要素も付加されている。この要素を検討するため、もう一話、「裏木曽の大ヒノキ」と題する日本の昔話を挙げたい。梗概は以下の通り。[17]

江戸時代の終わり頃、裏木曽の付知（つけち）というところの出（いで）の小路山（こうじやま）の麓に大きなヒノキがあった。ある日、役人がやって来て、江戸城二の丸の心柱にするので、その大ヒノキを切ることになった。村の杣人の若い二人が選ばれて切りに行ったが、日が暮れたので家へ帰った。次の日二人が行ってみると、ヒノキの切ったはずの部分が元通りになっていた。このようなことが三日、四日も続き二人が困っていると、白髪の老婆がやって来て、「切った分のオガクズを焼いてしまえばよい。そうすれば切り口が塞がることはない」と教えてくれた。老婆の言った通りにして、二人は大ヒノキを切り倒すことができた。その晩のこと、役人の泊まっている宿屋や杣人の小屋から火が出て、そこら一帯を焼いてしまった。出火原因は分からず、村人たちは、白髪の老

婆は大ヒノキの精ではないかと噂した。役人たちも無理矢理大ヒノキを切らせたので祟りが恐ろしくなり、そこに祠を建てた。今の護山神社がそれである。

右記の「裏木曽の大ヒノキ」では、樹木が再生したことを目撃した杣人二人が、次のような会話を交わす。

「おかしなことも、あるもんやなあ。何かにばかされとるんとちがうか？」

「うん。ばかされとるんやのうて、たたりかもしれん。よその山ではな、大スギをきると、きり口から血がにじみでたとか、きった者が血ィ吐いたとか言いよった。いやなことやなあ。わしらにも、たたりがあるかもしれん。」

会話の中で「よその山ではな、大スギをきると、きり口から血がにじみでた」と言うように、切る時に樹木が血を流す話は、ある程度流布していたことが分かる。

樹木が血を流す要素は、第二章で確認した「白頭公」に見られた要素である。ただ、樹木が血を流す要素が、「白頭公」から日本の昔話に取り入れられたと考えるには疑問が残る。なぜなら、「白頭公」よりも、日本での知名度が遙かに高い『三国志演義』に同様の要素が見られるからである。

『三国志演義』「第七十八回　風疾を治さんとして神医身は死し、遺命を伝へて奸雄数終ゆ。（治風疾神醫身死傳遺命奸雄數終）」に、次のような場面がある。

曹操は、関羽を葬った後、夢に関羽の姿を見るので安眠できなかった。そこで、新しく始建殿を立てようとし、その梁にするため躍龍祠に生える梨の大樹を切らせることにした。

曹操は大いに喜び、さっそく人夫にこれを伐り倒させることにした。翌日、この梨の大樹にはノコギリが入らず、斧も歯が立たないため、伐り倒せないという報告があった。曹操は信じず、自ら数百騎を率いて、ただちに躍龍祠の前まで行き、下りて、その樹を仰ぎ見た。……中略……曹操が伐れと命じると、土地の古老

数人が進み出て諫(いさ)めて言った。「この樹は樹齢数百年、頂きにはいつも神人がいらっしゃいますので、伐ってはいけません」。曹操は大いに怒って言った。「わしはこれまで天下をあまねく経巡ること四十余年、上は天子から下は庶民に至るまで、わしを恐れない者はいない。どうして妖神が我が意に逆らおうか」。言いおわるや、腰に佩いていた剣を抜き、手ずから切りつけた。ガチンと音がすると、曹操は全身に血を浴びた。曹操は大いに驚愕し、剣を投げ捨て馬に飛び乗り、宮殿にもどった。[18]

躍龍祠のご神木に切りつけた曹操が、樹木から流れ出た返り血を全身に浴びた、というのである。

衆知のように、『三国志演義』は江戸時代に日本にもたらされ、訳本の『通俗三国志』を通じて大衆化していた。当然ながら、『搜神記』所載の「白頭公」よりも『三国志演義』の方がより広く読まれており、樹木が血を流す要素は『三国志演義』から日本の昔話に取り入れられたと考える方が蓋然性が高いだろう。

おわりに

古代中国において、樹木が再生する現象は怪異として認識され、国家の興亡に関わる災異思想の文脈で理解されていた。しかし後漢以降、一故人の霊威や個人的な体験として個人の次元で語られ、六朝志怪に採録されるようになっていった。さらに、『春秋左氏伝』から人ならざる者たちの会話を盗み聞く要素を取り入れ、盗み聞きによって状況が打開され物語が展開する説話として成立した。それは、「怒特祠」に見られたように、切っても再生してしまって倒せない樹木を、盗み聞きによって切り倒す方法を知り、その通りにして切り倒すという説話である。

一方、日本では当初、樹木が再生する要素に注目せず、『今昔物語集』に見られたように、盗み聞きによって切れなかった樹木を切り倒す説話として理解された。その後、『三国志演義』から樹木が血を流す要素を取り入れな

がら、再生する樹木及び盗み聞きによって切れなかった樹木を切り倒す昔話として、各地に伝播して定着していった。冒頭に挙げた「七本ヒノキ」も、上述してきたような再生する樹木の説話の変遷のうえに語られるようになったと考えられるのである。

1　『南方熊楠全集第二巻　南方閑話・南方随筆他』（平凡社、一九七一年）に拠る。
2　十津川村教育委員会編『十津川郷の昔話』（第一法規出版、一九八五年）に拠る。
3　『太平廣記』巻四〇七「草木二」所引『神異経』。以下、『太平広記』からの引用は全て張國風會校『太平廣記會校』（北京燕山出版社、二〇一一年）に拠る。
4　『漢書』巻二七中之下「五行志」。以下、『漢書』からの引用は全て百衲本『漢書』に拠る。
5　『漢書』巻二七中之下「五行志」。
6　佐野誠子「第一章　志怪の文脈―歴史書の拡大と変異の記録」（『怪を志す』名古屋大学出版会、二〇二〇年。初出は、「五行志と志怪書―「異」をめぐる視点の相違」『東方学』一〇四、二〇〇二年。）参照。
7　百衲本『南史』巻八〇「賊臣・侯景」に拠る。
8　『太平廣記』巻二九二「神二」。
9　『芸文類聚』巻八八「桐」所引『異苑』（『宋本藝文類聚』上海古籍出版社、二〇一三年）に拠る。
10　『風俗通義』巻九「怪神・世間多有伐木血出以爲怪者」（王利器『風俗通義校注』中華書局、一九八一年）に拠る。
11　注（6）所掲佐野氏書「第二章　志怪の系譜―五行志との関わりを手がかりに」（初出は、「『宋書』「五行志」と志怪書」『桃の会論集』三、二〇〇五年。）参照。
12　『太平御覧』巻九〇〇「獸部十二・牛下」所引『搜神記』（中華書局、一九六〇年）に拠る。
13　拙稿「「運命の盗み聞き」説話―六朝志怪「陳仲挙」から「産神問答」に至る説話の変遷について―」（『福岡女学院大学紀要人文学部編』三〇号、二〇二〇年）参照。
14　『十三経注疏』本に拠る。

15 『今昔物語集』巻一一第二二話「推古天皇造元元興寺語」（池上洵一校注『新日本古典文学大系三五　今昔物語集三』岩波書店、一九九三年）に拠る。

16 関敬吾『日本昔話大成』第七巻（角川書店、一九七九年）に拠る。

17 赤座憲久編『定本日本の民話18　美濃の民話第一集第二集』（未来社、一九九五年）に拠る。

18 操大喜、即令人工到彼砍伐。次日、回報此樹鋸解不開、斧砍不入、不能斬伐。操不信、自領數百騎、直至躍龍祠前下馬、仰觀那樹。……中略……操命砍之、鄉老數人前來諫曰、「此樹已數百年矣、常有神人居其上、恐未可伐」。操大怒曰、「吾平生遊歷普天之下、四十餘年。上至天子、下及庶人、無不懼孤。是何妖神、敢違孤意」。言訖、拔所佩劍親自砍之。錚然有聲、血濺滿身。操愕然大驚、擲劍上馬、回至宮内。（『國學基本典籍叢刊　醉耕堂刊毛宗崗評本三國志演義』國家圖書館出版社、二〇二二年に拠る。）